

Anders

Tornvall助教授(リンシェーピン大学、スウェーデン)
のアポイントメント・プログラム招請について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学国際交流センター 公開日: 2013-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠原, 敏彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/14773

X Anders Törnvall助教授（リンシェーピン大学、スウェーデン）のアポイントメント・プログラム招請について

商学部助教授 篠原敏彦

トーンヴァル先生は、1996年度明治大学国際交流基金事業によるアポイントメント・プログラムにより同年4月15日に来日され、2回の講演、並びに大学院生や学部学生との交流を終え帰国された。ここに先生の略歴と本学での活動を簡単にまとめて報告する。

・アンダーシュ・トーンヴァル先生の略歴と業績

アンダーシュ・トーンヴァル先生は1937年スウェーデンに生まれ現在60歳である。同国ルント大学教育学部を卒業後、リンシェーピン大学大学院に進まれ、1982年には博士号を取得され、現在リンシェーピン大学において研究活動をされている。この間、1970年にはアメリカはイリノイ州のコンコーディア・カレッジで、1974年より75年にはイギリスのランカスター大学で、1986年にはアメリカのハーバード大学にてそれぞれ客員教授を歴任された。主な著作には、教育や倫理に関するものが多いが、特に先生の最近の研究テーマには、人間に内在する労働への意欲や労働倫理に関するものがある。

リンシェーピン大学における先生のもう1つの顔は、大学の中核的な研究教育機関『SWETECH』（SWEDISH TECHNOLOGY IN FOREIGN COUNTRIES）のプログラム・ディレクターという重責を果たされていることである。同研究所は、国際市場戦略に関心をもつ同大学卒業生や輸出活動を行う社会人に対して各種の情報やマネジメント・プログラムを提供している。つまり、世界各国市場の環境、社会、文化、あるいは貿易、工業、経済状況、法律などに関する知識を提供して、それらが各国のビジネス戦略や技術動向にどのような影響を及ぼすのかを研究、提言している。とりわけ同研究所が最近注目しているのが、アジア地域、わけても日本や韓国、香港な

どで、先生自身も既に研究所の調査目的で幾度となく日本を訪問されており、今回の来日でも短期間にもかかわらず本学でのプログラムと並行して精力的に実態調査を実施された模様である。

・本学での活動

本学での講演は下記のように2回実施されたが、講演以外にも大学院生や学部学生との交流が数回にわたって行われた。

第1回 『スウェーデンの社会・福祉システム』その1

“Social System and Social Welfare in Sweden-an Analysis”

日時 4月16日（火曜日） 午後3時より5時まで

場所 駿河台校舎 7号館 732番教室

第2回 『スウェーデンの社会・福祉システム』その2

“Social System and Social Welfare in Sweden-an Analysis”

日時 4月18日（木曜日） 午後3時より5時まで

場所 駿河台校舎 大学会館 第5会議室

第1回の講演では、特に学部学生向けに、スウェーデン社会の現状を中心として政治経済や文化、宗教にまたがる幅広い視点から、現在の福祉システムが検討された。また同時にスウェーデンの経済発展と政治システムのプロセスとの歴史が福祉の成立にどのような関わりをもってきたかが考察された。第2回の講演は、スウェーデンの福祉システムが抱える問題点を提起することにより、それが、経済や政治システム、あるいは産業、教育などとの関係でどのように位置付けられるべきかが考察された。また、日本とイギリス、そしてスウェーデンの間で福祉システムの国際比較をされ、各国のもつ福祉の特徴と問題点などでも指摘された。これらの講演を通じて参加した学生や院生から活発な質問があり、福祉の在り方や欧州連合における福祉制度の将来像などについて多くの意見がだされた。

今回の先生の講演や学生達との交流により、普段なじみの薄いスウェーデンに関

わるさまざまな知識を蓄積することができたことは極めて有意義であった。そうしたなかで極めて印象的であったのは、学部学生との交流会における先生の真摯な態度であった。初歩的な質問や脈絡のない質問についても時間をかけて答えて下さり、素人同然の集団に分かりやすくかみ砕いて丁寧にお話をされる様子には本当に頭の下がる思いであった。また講演以外に研究者として、スウェーデンでの大学教育の現状や大学や教員の抱える問題点などについて幅広く意見の交換ができたことは極めて大きな収穫であった。

今回の一連の講演をきっかけにしてリンシェーピン大学と本学とのさまざまな交流が一層活発になることを期待したい。

最後に、今回の講演会や先生の滞在など細部にわたりご支援を賜った明治大学国際交流センターのスタッフの皆様一同に衷心より感謝申し上げたい。